

## 前角老師とその門下

(1)

前回、ニューヨーク州マウント・トレンパーにある道真寺から禅の状況を報告いたしました<sup>が</sup>、私はその直後、道真寺を離れ、マンハッタ<sup>ン</sup>にほど近い禅真寺に移り、四ヶ月の滞在の後、今既にロスアンゼルス禅センター（仏真寺・ZCLA）に移っております。

禅真寺の状況については後述いたします<sup>が</sup>この禅真寺のメンバーの一人、ヘレン女史はアメ

リカ人で日本人から嗣法した五人の禅者について執筆中であります。嗣法ということは私共曹洞宗の僧侶にとってたいへん重要なことであり、すべての寺院住職は嗣法（法を受け嗣ぐこと）を受けているわけですが、こちらでは嗣法を受けた人は法の相続者（Dharma Successor）として、師の印可を受けた人、あるいは、それ相当の人に限られていて非常な尊敬を受けています。

さて、その五人というのは鈴木俊龍老師<sup>註①</sup>からベーカー師、鈴木包一師からクオング師であり、

中川宗淵老師からマウリン師であり山田耕雲老師からエイチケン師であり、前角老師からグラスマン師であります<sup>②</sup>が、嗣法者はこの五人にとどまらず、実に前角老師の嗣法者だけでも既に五人いて、更に遅かれ早かれ嗣法を許されると思われる人達が何人もいます。

さて前角老師を紹介いたしますと、老師は大山博雄とも孤雲（軒）とも称されておりますが、前の曹洞宗審事院院長とかさまざまな要職を歴任された黒田白純師（栃木県、光真寺）の三男として一九三一年に生まれられ、師父の法を嗣がれるとともに臨済宗の宇坂光龍老師と曹洞宗の安谷白雲老師（原田祖岳老師の法嗣）からも印可を受けられ、一九五六年渡米、一九六八年にZCLA（仏真寺）を開創され、国籍もアメリカ人国籍をとられて、アメリカ人教化、禪の普及に全力を傾注されている方です。そして、その間二十年、嗣法のお弟子（日本語で

先生と呼ばれている）五人とそれに準ずる人達が各地に散らばって坐禪の普及につとめ今日の状況になっっているわけです。機関紙『TEN-DI-RECTION』に掲載されているそれらの支部はカリフォルニア・マサチューセッツ、ニューヨーク、ニューヨーク、オレゴン、ユタ、ヴァーモントなどに十六ヶ所、ヨーロッパに四ヶ所（阿姆斯特ダム一、イギリス三）メキシコに一ヶ所あります。私がいた道真寺、禪真寺もその一つであります<sup>③</sup>が更に認定されていない坐禪グループも相当あると思われ<sup>④</sup>ます。

私はニューヨーク滞在最後の夜、メンバーの一女性が指導している坐禪会に案内されましたが、そこでは十名程のクエーカー教徒の人達が教会に集まって坐っており<sup>⑤</sup>ましたし、道真寺のダイドー先生はニューヨーク州の刑務所の中に「ロータス・フラワー禪堂」を持って指導にあたっておられます<sup>⑥</sup>。またZCLAにテキサスの

田舎からやってきた青年の話では、そこではまだほとんどザゼンは知られていないので、奥さんともう一人のメンバーの三人で五年間程坐禅を続けている。私達はテキサスの開拓者だなどと話しておりましたが、とにかく、こうして坐禅は確実にその輪を広げております。しかし文化、伝統、価値観、常識すべてが異なっている中で、さまざまな問題を含んでいることは言う待ちません。そうしたことから毎年一度、それらの先生達はZCLAに集まり老師を囲んで、いかに正法を伝えてゆくか話し合いが持たれています。その会をホワイト・プラム・アサンガ（白梅会）と言っており、私は幸いにオブザーバーとして参加することを得ましたが、ZCLAを本山として各地に禅が根を下してゆく様子はきわめて興味深く新鮮なバイタリティと燃えるような弘法の熱気を感じずにはおられませんした。

#### 前角大山

④ クラスマンテッゲン……ピーターマチスン  
 ⑤ ケンポー マーズル  
 ジョーユウ ベック  
 ⑥ チョーゼンベイズ  
 ⑦ ダイドーローリー  
 ⑧ シンシンウイック  
 ……テッシン アンダーソン  
 ……ジツドウ アンチエタ

注1 鈴木師は静岡県焼津市林叟院の住職でサンフランシスコに渡り禅の普及につとめられた。タサハラ禅堂、グリーンガルチ農場は非常に有名である。師の『zen mind Beginner's mind』はアメリカで禅を志す人達の必読書のようになっており、重要な存在となっている。包一師は法嗣で現林叟院住職である。

2 アメリカ禅センター名簿を見ると約百五十のセンターが掲載されており、韓国系の三十の他に臨済宗佐々木老師のグループ、曹洞宗片

桐老師のグループ、カップロー師のグループが大きな勢力となっている。カップロー師は原田祖岳師、安谷老師、安谷老師、中川老師に參禪された人で、師の『The three Pillars of zen』はアメリカの禪の普及に大きな影響を与えたものと思われる。

3 大道師は『Ten Direction』にロータス・フラワー禪堂を開くまでの経過と、いかに刑務所の囚人達が「人生とは何か」「自由とは何か」きわめて真摯な問題をかかえて真劍に坐禪にとりくんでいることを報告している。そして更に私達は皆、自我という檻かごの中に閉じこめられた囚人のようなものであり、この自我の檻をうち破らねば、即ち、無我ということを本当に知らなければ真の自由は得られないことを説いている。

4 前角老師の一番弟子であり『Ph.D(Doctor of Philosophy)』の学位を持つ数学者であり、今

はベーカー禪堂の堂頭できわめてユニークな活動を行っている。(次章参)

ピーターマチソン師(無量)は現在アメリカで最も著名な作家の一人であり、臨濟宗の鳴野老師、前角老師に学び、今テツゲン先生のもとで学んでおり、間もなくテツゲン先生の最初の嗣法者になると考えられる。

5 ゲンポー師はオランダ・アムステルダムにセンターを持ち、更にポーランド、ドイツなどに行つて次から次へと接心を行つて勢力的に活動している。

6 チョーゼン師は女医であり、オレゴンで活躍している。因よゐに、この国ではほとんどの坊さんは何らかの職業を持っており、ZCLAも五十名程の滞在者(多い時は七、八十名)がいるが日中はそれぞれの職業に従事している。

⑦ シン師は Ph・D の学位を持つ物理学者であり次に老師から嗣法を受けると思われている。

⑧ テツシン師は現在メキシコ、ゼン、センターの主幹で、十五年程前に新潟県大栄寺に安居したことがある。

(2)

禪真寺 (ZEN Community of NEW YORK

とも Greyston Seminary とも云っている) について述べますと、ここはテツゲン先生の道場で約二十名の滞在者が共同生活をしながら修行しておりますが、他に約百五十名程の会員の人間がいます。そしてその生計の為にベーカーリーを経営していることと、その経営、労働そのものを作務(ワークプラクティス)としてとらえ実践していることに最も大きな特長があります。中国の禪宗史において八世紀に百丈懷海禪師が労働を叢林の生活の中にとり入れたことは、それ以前の歴史からみると全く破天荒なできごとであったように、今テツゲン師は仏法は生活の

中に実践されてこそ本当に意味があるということから作務、労働を非常に重視されて単なる自給自足、あるいは生計のために働くのでなく、労働そのもののなかに仏としての自己を実現するべく指導をされています。従って「作務とは何か<sup>①</sup>」ということが常に問われています。

私が滞在していた四ヶ月間は十一月の感謝祭十二月のクリスマス、年末年始ということではベーカーリーの最も多忙な時で、特にクリスマス前後はメンバーの中からこれでは戦争地帯だなどという悲鳴とも思える声が出たりしましたが、これがベーカーリー禅堂の臘八接心である、菩薩の誓願は尽きることのない闘いのようなものである。修行者は安きを求めてはならないということとでそれを乗り切ることができました。

そうして年末の仕事が終わりますと元旦から十日間セミナー(研修会)が五、六十名の参加を得て「発菩提心」をテーマに開かれました。申

しあげるまでもなく、道元禪師が『学道用心集』に示された第一は「菩提心を発すべきこと」というのでありますが、菩提心とは何か、慈悲とは何か、小乗仏教、キリスト教、ユダヤ教、大乘仏教、道元禪師の立場から、それぞれの講師が招かれて講議があり、ディスカッションが極めて自由に行われていかにもアメリカ的な研修会でありました。もちろん坐禅と読経も併修されたことは言うまでもありません。

さて、次に私が興味深く感じたことは、メンバーは『甘露門』に示された「五如来賓号招請陀羅尼」に基いて五つのグループに分けられ、その中の一つにソーシャル、アクション、グループというのがあります。主に滞在者以外の人々が中心になって行っておりますが毎月一度ホームレス（家のない）の人達のために施食が行われており、用意された二百五十人分程の食事は韋駄尊天の前におかれ、甘露門が読誦されて所

定の場所に運ばれてゆきます。そして更に今、それらの人たちのための収容施設と授産所（仕事を教える）を始める企画が市当局やキリスト教の人達を協力して進められつつあることでもあります。これらの事が「菩提心を発すべきこと」あるいは「仏の慈悲行」の実践として行われていることは申しあげるまでもありません。

そして更に興味深かったことは『英訳甘露門』の読誦が、私の席をおいたその時から始まったことでした。それ以前は日本と同じように読誦していたのですが、英語とドラニをミックスして読誦するのですが、なかなか声がそろはない、儀式としてどこか不自然である、そのようなことから何回も読誦の仕方がかえられ、私の滞在の最後には「発菩提心陀羅尼」「授菩薩三摩耶戒陀羅尼」の所で笛が鳴らされ、最後の「普回向」の所はジュエイシンの歌が斉唱されるといふことになって、一応形がととのったようです。

しかし、まだ修正される可能性があります。日本では既に完成した儀式法要、あるいは講式などがありますが、始めはおそらくこの如くであったに違いないと感じたことであります。又同時に時代や状況に応じて新しい形の儀式法要が考えられてしかるべきであるとも感じたことであります。

以上、わずか四ヶ月間の見聞したことをまとめてみました。セミナーの後、ベーカリー禅堂は平日のスケジュールにもどり、朝昼晩の坐禅と読経、ベーカリーでの作務ということになります。一月は注文の少ない時でもあり、首座を含む数人は毎日八時間の坐禅が課せられるということでもあります。

註

① セミナリーの講師的存在であるルー・ミツネン師は哲学者であり、『テン・ディレクション』に「作務とは何か」という論文を寄せている。

② メンバーの人達は必ずしも皆仏教徒であるわけではなく、カトリックであったり、プロテスタントであったり、ユダヤ教徒であったりします。従ってそれぞれの宗教を尊重しながら仏法の理解を深めてゆくという姿勢がここにあるわけです。

③ 『甘露門』は江戸期、檀家制度が定着してゆく過程で、面山師によって編纂されたもので、曹洞宗の施餓鬼法要の中心をなすものである。

④ 甘露門について、明治期に大内青巒居士は漢音で読む所や唐音で読む所や日本語の所やダラニの所があつて不自然であると批判していますが、英訳されることによつて英語とダラニの二つになつたわけではなくなったというべきか、『英訳』の紹介と、テツゲン先生のきわめてユニークな受用の仕方について次回にまとめてみる予定です。